



格好の小道具

長岡弘樹

舞台上には一枚の皿が用意されていた。皿の上には卓球ボールほどの白い球体が幾つも積まれ、ピラミッド状になっている。全部で二十個ほどもあるか。観客席にいるわたしの目には、それらは米で作った普通の団子に見えた。

ここで一人の少年が舞台上に登場する。彼は団子を一つ手に取り、躊躇なく頬張った。そして顎を動かしながら、皿の横に準備してあった紙コップを持ち、口につけてぐつと傾けた。咀嚼中の団子を、無理やり水で胃袋に流し込んだようだ。

口の中が空になると、少年はすぐに次の団子を手に取り、いまと同じようにもぐもぐとやりながら別のコップを使った。その後も彼は、三つめ四つめと白い団子を、コップ片手にどんどん口中に詰め込んでいった。かなりのスピードだ。結局、皿に積まれていたものすべてを、ほんの一分間ほどで平らげ、一礼してから少年は舞台を降りていった。

つまりこれは「大食い」かつ「早食い」の芸なのだった。かつてわたしが目にした光景である。たぶん中学生の時分だ。だとしたら三十七、八年も前のこと。だから記憶がかなりあやふやなのだが、おそらく文化祭での出来事だったと思う。芸を演じた少年は、わたしより一学年上の先輩だったはずだ。

こんな昔の生えた昔話を、ここで紹介したのはなぜか。

先日、軽い興味から、舞台上使う小道具についての文献をひもといてみた。すると、ある芝居についての記述に目とまった。その芝居には弥次さん喜多さんが登場し、二人が饅頭の食べ競べをする場面があるという。これを演じる俳優は、かなりの数を食べなければならぬので、本物の饅頭では体がもたない。そこで、紙を使って中が空洞のそれを作ったのだそうだ。ニセ饅頭とはいえ、観客席からは遠目になるため、十分本物に見える。問題は咀嚼したとき口の中に紙のカ



ながおかひろき●作家。山形県生まれ。筑波大学第一学群社会学類卒業。2003年「真夏の車輪」で第25回小説推理新人賞を受賞。05年「陽だまりの偽り」でデビュー。08年「傍聞き」で第61回日本推理作家協会賞短編部門を受賞。13年「教場」が週刊文春ミステリーベスト10第1位に。他の著書に「白衣の嘘」「血縁」「教場2」「教場0」「道具箱はささやく」「救済 SAVE」「119」「緋色の残響」など。

スが溜まる点だが、それは茶を飲むふりをして、湯飲みの中に吐き出して処理したらしい。

このくだりを読んで、ようやく気づいたのだ。かつて先輩が披露した芸にはトリックがあったのだと。

本稿を書くにあたり、試しに自分でもコピー用紙を丸めて口に入れてみたところ、すぐにオエッとえずいてしまった。どうやら食べる演技をそつなくこなすには、それ専用の紙でなければ無理のようだ。そこで文献を読み返してみたら、なるほど「ニセ饅頭は雁皮紙と呼ばれる薄い和紙で作った」と書いてあった。

ともあれ、紙はいろんなトリックに使えるため、推理小説を創作するうえでも格好の小道具となる。例えば、ある程度の厚みを持った紙なら、やりようによっては、そこに文字や図形のみならず音声まで記録できてしまう。この面白い性質を利用し、一編のミステリを書いたことがある。反省点の多い拙作の中で、これは例外的に上手くいったものの一つとなった。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

伐ることで育つ森がある。
木を伐りすぎると森が減る。でも、何もしないと隙間なく木が生えてきて、日当たりが悪くなってしまいます。森がすくすく育つためには、木を伐ること(間伐)も大切。さらに、そのとき伐った木(間伐材)は無駄にせず、紙づくりの原料にも使われているんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。 <http://kamitsubu.com/>

今回は6月4日号、犬山紙子さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

山形市 霞城公園にて。

Photo:Shiro Miyake